

## 高校生の学習における生成 AI との向き合い方

香川県立高松高等学校 1年 黒川 奈々花

<はじめに>

「ChatGPT」や「BingAI」といった、いわゆる対話型の生成 AI が話題だ。今回の論文作成にあたって、試しに使ってみたが、機械特有のたどたどしさはなく、まるで人間と会話しているかのような自然な言葉遣いで、様々な質問や指示に速やかに回答してくれる。とても手軽なツールだ。文字や対話だけでなく、画像や音楽を生成する AI なども既に普及しているという。

先日、少し気になる記事を読んだ。夏休みの宿題の定番である読書感想文や自由研究などは、もはやこの生成 AI に任せておけば、機械の手によるものかどうか見分けがつかないレベルで作れるようになってしまったというものだ。私は、試しに使ってみた程度の経験しかないが、確かにそのような問題が起こりうるだろうことは理解できる。それくらい高度な能力を有している。この論文も AI と対話を重ねることで、いとも簡単に作成できるのかもしれない。

飛躍的なスピードで進化を遂げているこの生成 AI は、私たちの暮らしやビジネスの世界を一変させると言われているが、私たちのようにまだ基本的な学習の途上にある高校生は、この新技術にどのように向き合っていけばよいのだろうか。学習の中にどのように取り入れていくべきなのか、それとも能力の伸長を妨げるものとして距離を置くべきなのか、考察することとしたい。

<新技術への向き合い方>

AI に限った話ではなく、新しい技術やツールは私たちの生活やビジネス、時には社会の在り方そのものにまで大きな影響を及ぼす。私たちは物心がついた時からスマートフォンを片手に、インターネット上で様々な情報や知識を得ながら暮らしているが、これは 30 年前には想像もされていなかった変化である。

私たちの世界はもはやインターネットがない時代には戻れないし、人間の欲望は尽きることを知らないのだから、誰もが現状の世界が最終で最善などと満足していない。人間は常に便利さを求めているが、そのような欲望そのものが決して悪いことなのではない。なぜなら、いつの時代もその食欲さがさらなる科学の進歩をもたらす原動力になってきたからである。

注意しなくてはならないのは、科学が進歩し、新たな技術、ツールが誕生することには、必ず功罪、つまりプラスとマイナスがあるということだ。私たちはその功罪両面について、特にマイナス面から目を背けずに、情報へのリテラシーをしっかりと持った上で、マイナスはより小さく、プラスはより効果的になるようなルールを整備していく必要がある。

「ChatGPT」や「BingAI」をはじめとした対話型生成AIは、まさに今、世界中が高度化、実用化の技術開発を競って行っている最中である。一方で、その加速度的な進歩に、ルール整備どころか、技術の真の活用方法さえ十分に確立できていないようにも感じる。つまり、何か成し遂げたいことがあって、そのために技術やツールを開発するというのが普通であり、私たちの発展の歴史であるが、この生成AIという新技術は、想像以上の可能性の拡大や変化をもたらすレベルに急速に進化したために、技術を使う人間の側がまだ追いつけずに、戸惑っているのではないか。

しかし、そのような状況であったとしても、私たちはルールが整備されるのをただ待っていてはいけなし、この生成AIという新技術に触れることを怖がってはいけなし。まずはこの新たなツールを受け入れて、慣れて、使いこなすだけの技量を身につけたい。新たな技術は使いこなして初めて意味があるからだ。技量に、リテラシーとルールが伴って初めて、社会の発展を実現する助けとなり、安心して利用できるツールになる。

#### <学習における生成AIの使い方>

従来のAIは、決められたルールやデータに基づいて、識別や予測などを行うことが目的であったのに対して、生成AIは、インターネット上のデータを学習し、そのパターン理解をして、瞬時に新たなデータを生成するものである。そのデータ量は、おおよそ人間ではインプットし得ない膨大なものであり、小学生レベルの設問から、例えば司法試験のような難解な設問まで、幅広い分野の様々な問いに、瞬時に回答を整った文章で導き出すことができる。

そのため、これまで私たち学生が自ら行ってきた感想文やレポートといった文章の作成や、英文の翻訳、論文の要約や情報検索、ブレインストーミングなどの作業を、生成AIはいとも簡単に対応することが可能となっている。

確かに、このような生成AIを使うことが前提となれば、私たちの学習環境は大きく様変わりすることになるが、以下のような注意点や懸念点が指摘されていることは認識しておく必要がある。

まず、生成AIはインターネットを情報源とするため、必ずしも正確な情報のみを根拠にしているとは限らないという点である。

また、AIが生成した文章は、理路整然としており、自然な言葉遣いの文章にはなっているが、内容に深みがなく、オリジナリティのある個性的なものにはなりえないとも指摘されている。

これらはいったい何を意味するのか。それは生成AIが作成したデータは、いかなるものであろうと鵜呑みにすることはできず、精査することなく成果物として活用できる代物ではないということだ。さらに、生成AIが作成した文章等を、精査や検証することなく無秩序に利用を繰り返すことは、誤情報や機密情報、個人情報等の拡散を招きかねないという深

刻なりリスクを含んでいることにも深く留意しておかなくてはならない。

確かに、生成 AI を利用し、それを安易にそのまま成果物として提出しても、「ズル」は明らかにならないかもしれない。一定レベルの評価も得られるのかもしれない。しかし、そのことは明らかに、自らの能力伸長のチャンスを逃していることになる。課題に向きあい、多くの書籍や資料、インターネット上の情報にあたって、それらを分析したり、理解したりしながら、自ら解を求めるのが学習であるとすれば、この作業を怠って得られる成果は無意味なものになる。仮に、目先で何か利益が得られたとしても、いずれ、それが自らの実力ではなく、能力を伸ばす機会を失った結果であることを痛感する局面を経験することになるだろう。

学習における生成 AI の使い方として、最も効果的なのは、必要な情報を膨大なデータベースから収集し、それを分類、分析、要約するような作業への利用だと考える。時間を短縮できるということもあるが、自らの力だけで調べられる資料にも限りがあり、調べるべき資料を選定する際の知識や、検索に用いる語彙にも偏りがあるかもしれない。このような場面で AI を活用することで、より広範囲に、自らではたどり着けない情報にも触れることができ、検討や考察を深められることが期待できる。もちろんこのような活用を行うためには、AI が示す回答に含まれる誤りや矛盾を、不適切なものだと判断できるだけの能力や知識が自らに求められることは言うまでもない。

#### <最後に>

私たちは、常に目先の目新しさや便利さに惑わされることなく、新しい技術が、社会にとって、人間にとって、どのような価値をもたらし、どのような害悪が生じるおそれがあるのか、見極めなくてはならないと考える。功罪両面を理解し、いかにマイナスを抑制し、プラスを拡大するか、そのためのルールを常にアップデートしながら、技術と人間は上手に付き合っていかななくてははいけない。

#### <参考文献>

河合塾「ChatGPT 等の生成 AI に関するアンケート 調査結果概要」  
<https://www.keinet.ne.jp/teacher/research/enquete/23/20230605.pdf>

文部科学省「初等中等教育段階における生成 AI の利用に関する暫定的なガイドライン」  
[https://www.mext.go.jp/content/20230710-mxt\\_shuukyo02-000030823\\_003.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230710-mxt_shuukyo02-000030823_003.pdf)

第一生命経済研究所「生成 AI 時代に求められる教育のあり方」

<https://www.dlri.co.jp/report/ld/247029.html>

早稲田大学「生成 AI などの利用について」

<https://www.waseda.jp/top/news/89507>